

伊東隆利氏が語る新谷 悟氏執筆の

開業医だから発見 できる口腔がん

そのサインの見つけ方と対応法



評者：伊東隆利



著者：新谷 悟

こんな本が欲しかった！ というのが、読了した最初の感想であった。文章の端々に著者のこれまでの深い経験がにじみ出ており、「開業医だから発見できる…」という言葉には実感があふれている。

口腔内のがんは直接目に見えて触れられることを考えると、他の臓器におけるがんの発見と比べ、わかりやすく確実である。口腔がんの早期発見者としての歯科医師の働きが確実になると、歯科医師を社会から見る目も変わってくると思われる。

歯科医療は命から遠い分野を扱う仕事、と国民も患者も歯科医療関係者でさえも考えているが、口腔がんが「命」と、そして「QOL(生活の質)」ともっとも深く関わっている分野であることを、この本は教えてくれる。

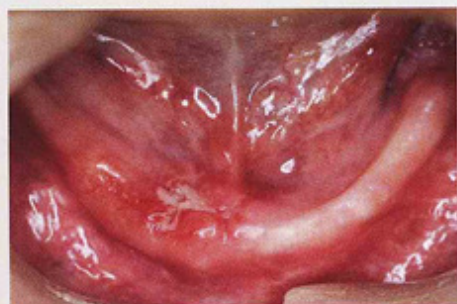
現在の超高齢社会にともない、口腔がんに遭遇する歯科医師は多くなっている。かつて私の学生時代は、口腔外科の教授から「がんは諸君が一生に一度出くわすかもしれない」として講義を受けたものであるが、今や歯科医なら誰でも数年に一度、いや一年に一度は出くわす疾患となった。

口腔がん診断は、他臓器のがん診断法のような特殊な

薬剤や高度な機器を使うのではなく、自分の眼と自分の触覚、嗅覚など五感を駆使することで実現できる。早期発見できれば、歯科医師冥利に尽きる。口腔がんを見つけて何よりも患者に感謝されるのは、早期に発見し治療を施すと、患者の生存率も著しく向上し、患者の命とQOLをしっかりと守ってあげられることである。

私の体験から、過去10年間のカルテを調べると、約50名の口腔がん疑いの患者を発見し、熊本大学病院歯科口腔外科(篠原正徳教授)に紹介、加療をお願いしているが、早期の発見により生存率も上昇し、患者からたいへん喜ばれている。また当院のスタッフにとっても「がん」を早期に発見し、救命しえたことで、その後の口腔ケアにも熱が入り、患者との生涯にわたるメンテナンス体系ができあがって、スタッフの意識向上にも良い影響を与えた。

本書はわかりやすいので、歯科大生やスタッフにも好感を持って迎えられよう。是非、各歯科医院に1冊常備してスタッフ教育、患者説明用の資料として役立つ本である。開業医はもちろん、歯科衛生士や看護師の教育機関でもこの書が利用されることを望む。



義歯を調整しても変わらなければ口腔外科専門医へ。病理組織診断で下顎歯肉がんと判明した。(本書21ページより)



左側舌縁部にできた舌がん。触ってみよう。しこりを感じます。早く専門医へ。(本書38ページより)



これはがんではなく、白板症の症例。よくある病変です。見逃さないで経過を診ましょう。(本書46ページより)